11　偶感集　中巻

A 偶感集（1949年－1951年）

B 偶感集（1952年－1955年）

筑摩書房

渡辺一夫著作集 11

筑摩書房

渡辺一夫著作集11　偶感集　中巻

一九七〇年九月十五日　初　版第一刷発行
一九七六年十月　十　日　増補版第一刷発行

著者　渡辺一夫
発行者　井上達三
発行所　株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二一八
電話　東京二九一一七六五一
郵便番号　一〇一一九一
振替　東京六一四一二三
印刷　株式会社精興社
製本　和田製本工業株式会社
©渡辺芳枝一九七六

(分類)1398(製品)74811(出版社)4604

偶感集　中巻　目次

端　書　……3

A　偶感集（一九四九年―一九五一年）

a　**折にふれて**

辰野先生のこと　……8
露伴先生のこと　……11
古典と僕　……14
戯作者の精神　……19
平田篤胤の「大和魂」について　……26
僕の語学修業　……34
自由について　……46
服装の効用について　……57
宿命について　……62
ガーター勲章について　……67
教養について　……77

貝殻追放（オストラキスモス）について……80
一高的精神に悩まされた旧一高生の弁……86
架空旅行記……90
架空アメリカ留学記……96
絵画と僕……107
ラジオと僕……114
「親孝行」の告解……118
祖父志願者にされた話……127
読書の思い出……134
寛容（トレランス）は自らを守るために不寛容（アントレランス）に対して不寛容（アントレラン）になるべきか……162
宛名のない手紙……175
平和に耐えること……192

b　あの頃のこと

偽日記抄　二（一九四九年）……202
『きけわだつみのこえ』の序……209
似而非党員の告解……215

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

忌むべき郷愁（ノスタルジヤ）について……220
学生ストについてなど……228
「新東京音頭」で浮かれては困ることについて……236
三人の青年について……241
あの手のぬくもりは……247
じめじめしたはなし……256
将棋やボクシングや……266
師匠と弟子……278
二つの死の影の下で……289
若い地質学者の変身……296

B

偶感集（一九五二年―一九五五年）

a　折にふれて

ペストと竜……310
羊の寓話……314
水洗便所の効用……318
笑いの制裁力……322

私の卒業論文……334
文学者と社会……337
後の世の人々・我ら……345
『杜甫ノート』にふれて……348
「不戦の誓い」の日の感想……350
岸田先生のこと……354
内藤濯先生のこと……357
ボワソナード先生……361
新卒業生の一人への手紙……367
雑草録……373
立ちどころに太陽は消えるであろう……391
失楽園記……401
坐骨神経痛と孤独……409
金魚屋と選挙屋……413
ハイ・ファイ流行……418
本を読みながら……425
孤独と愛情……433

ある老婆の思い出……439
お臍(へそ)についての妄想……445
ユートピヤ……448
転矢気(てんしき)……453
一挿話……457
二つの純粋さ……459
酒について……461
美人の顔……463
姓　名……465
孫について……467
娘について……469
息子について……471
女優と息子……473
名僧智識を求める心……477
若い叔父さん……479
父と子……481
除夜の鐘……483

元いた家 …… 485
パリの記念 …… 487
b　あの頃のこと
春日抄 …… 490
宿命とは因果律だということなど …… 501
『インテリは生きていられない』を読まされて …… 507
偽日記抄　三（一九五三年） …… 520
生きている教師 …… 529

偶感集　中巻

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

端書

本『偶感集』中巻に収められた雑文は、一九四九年（昭和二十四年）から一九五五年（昭和三十年）までの間に書き綴った雑文のなかから二宮敬氏と大江健三郎氏とが選んでくださったものを土台にして、辛うじて再読に耐えるかもしれぬものを更に私が選び出したものである。再録しなかったものは、あまり幼稚すぎ乱雑すぎて再録に値せぬと考えたものに外ならない。上巻において、「不惑の年」にあってなおも惑い続けている私の姿が露呈されているとすれば、本中巻は、「天命を知る」べき年に達して居りながらも相変らず意地きたない心根の持主だった私の姿を見せてくれるだけである。もっとも、「天命を知る」という言葉が、諦観に達するとか、あきらめるとかいう意味だけだったら、若干その萌しは、ようやく見られるのかもしれない。遅蒔きすぎるが。

本巻中に収められた雑文の一つの「附記」に記したように、私は、匿名批評家から、「お前は、今までは共産党の檀家代表みたいだったが、それから少しは進歩したようだ」と言われるようになっていた。これは、今述べたような「天命の知り方」を心得られるようになった結果なのかもしれない。

全体を二つに分け、**A**には、一九四九年から一九五一年までの雑文を集めた。この区分には、格別な深い意味はないのだが、一九五一年には、ダグラス・マッカーサー大将が、日本再軍備の必要を説いたし、サンフランシスコ講和条約・日米安全保障条約が調印されたということを、私は思い出したからに外ならない。**B**に収録された雑文

は、一九五二年から一九五五年にかけて綴られた。**A**・**B**各々を、更に**a**・**b**と分け、身辺雑記類のものを**a**に、あの頃の世のなかを思い出させるような文章を**b**に収めた。しかし、この**a**・**b**の区分は、決して厳密なものではない。

反古同然の旧稿を整理しながら、「臆面もなく……」という反省と羞恥とを抱くことには変りはないのであるが、一方では、これが「あの頃」の私であったという感銘を深くして、身動きができないような思いでもある。そして、この思いのなかには、なつかしさもあることを、せめて赦していただかねばならない。私にも、たった一つの生命しか与えられていなかったのであるから。

一九七〇年一月

渡辺一夫識

A

偶感集（一九四九年—一九五一年）

a

折にふれて（一九四九年―一九五一年）

辰野先生のこと

先生についてなら、外にいくらでも剴切的確なことを書ける方々が居られる筈だ。僕のごときは所詮、よしのずいから天井をのぞくの類に外ならぬ。ただ責をふさぐために、一つ二つ思いついたことを記すことに止める。

学生時代に僕たちは、講義の後、先生を無理やりにひっぱって青木堂[1]の二階などへ行き、先生を囲んで雑談放談したことがしばしばあった。丁度、先生が新鮮な文体と豊かな味わいとを持った論攻や随筆を発表し始めて居られた頃だったので、我々は学生の特権を大いに濫用して、先生がまだ筆にされないでいる新智識を、あわよくば引き出そうとしたわけだし、更に、あのようにシックな文章を書かれる方法なり秘密なりを教えていただこうなどと、大胆不敵なことをも考えていたわけである。

或る時、僕は、先生に、「先生は、どういうものを手がかりにして、ものを書かれますか？」と、下っ端の新聞記者みたいなことをお訊ねすると、先生は、実にさりげなく、「本を読んでいてね、感動した一句に出会うと、それを何度でも読み返し、じっくり考えるんだがね」というようなことを答えられた。

先生が分厚いフランス文典を丹念に読破されているのに、文法のブの字も語られず、小ラルゥース辞典の「名句集」をほとんど全部暗記して居られるらしいのに、それらしいことをおくびにも出されないでいるということをい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com